

宇田鋼之介さん

[アニメーション監督・演出家]



小学校時代からマンガを読んだり、絵を描いたりするのが好きで、アニメーションの世界に進み、数々のヒット作を世に送り出している宇田鋼之介さん。ご自身の小学校時代の経験や、作品づくりに際して心がけていることを伺ってみました。

学年を超えたつながりが大事

小学校時代は、友達と遊ぶのが無性に楽しく、休み時間ももちろん、放課後は家に帰るとすぐ、ランドセルを放り投げて遊びに行っていました。

当時、私は天城湯ヶ島町（現伊豆市）に住んでいて、水遊びといえば川が主体。あまり泳ぐ必要がなく、実は小学校に上がってもカナヅチでした。そんな時、友達のお兄さんが泳ぎを教えてくれることになったのです。教えるといっても、いきなり足の届かないところに放り込まれる、なんともスパルタな方法でした。

このように、同級生だけでなく、上級生とも一緒に遊ぶ中で、泳ぎ方の他にも、遊び道具の作り方、ヤマメの捕り方など、いろいろなことを教えてもらいました。「ここまでは大丈夫、これ以上は危険」という線引きも、年上の子と一緒に体験しながら学びました。そういう上下のつながりはとても大事だったと思います。

小学校では、成長の面で大きな差がある1年生から6年生まで同じグラウンド、同じ地域で一緒に遊ばなければなりません。その中で、年上の子は年下の子をどう扱うかを覚え、年下の子は年上の子とどう付き合えばいいかを学びます。小学校はまさに、社会のコミュニケーションの基本を学ぶ場だと思います。

感じ方は人それぞれ違う

小学校時代にたくさん遊んだ経験は、

作品づくりにも大いに生きています。実際、最新作の映画『虹色ほたる～永遠の夏休み～』も、私の体験談が作品のベースとしてかなりの部分を占めています。作品の舞台となる1977年、私は原作の主人公と同じ小学6年生でした。

作品をつくる時には必ずテーマがあります。しかし、できた物語をどうとらえるかは、見た人にゆだねられるものです。『虹色ほたる』で、主人公たちは彼らなりの解決策を見つけます。でも、それはあくまでも彼らの解決策であって、一例にすぎません。

私は小さい頃から「こうでなくてはいけない」と、ものの考え方や価値観を押しつけられることがおもしろくありませんでした。小説でもマンガでも、「作者はそう思ったかもしれないけれど、自分は違う」と、時に反発を感じることもありました。

だから、国語の「登場人物はどう思ったか」とか「作者は何を訴えたかったのか」という問いが好きではありませんでした。確かに、順当に考えればそれが正解だろうという答えはありますが、本当にそうかなあと思うのです。実際、試写会の後にアンケートを取ると、人が感動する場面は本当に様々だとわかります。経験してきたものが人によって違うのだから、それは当然です。

もちろん学校の先生は、問いに対して何らかの答えを出さなければならない立場にあるでしょう。しかし、答えを出して終わりではなく、「でも、あなたは どう思う？」と、もう一度、子

どもたちに問い返してみしてほしい。そこから子どもたちが自分なりの答えを考えられるような導き方をしてもらえたらいいと思います。

自分たちが楽しむことが基本

作品づくりに関しては、まず作り手側が楽しむことを心がけています。そうでないと、映画としてはよくできていても、「おもしろくない」作品になってしまうからです。実際、「とりあえずやる」という姿勢でつくった作品は、作品としての出来は悪くなくても、評価は低いものになることがありました。

私が監督する時、最初にする作業は、その作品を愛することです。初見ではピンとこない作品も、何度も原作を読み返していくうちに、どこかに愛すべき点、おもしろい点が見えてくるものです。

世の中には“B級映画”と言われ、予算がなく、シナリオも練られておらず、ストーリーは破綻だらけという映画があります。しかし、その中には、なぜか無性にもう一度見たい作品があります。きっと、作り手側が楽しんでつくっていて、その熱が伝わってくるからではないでしょうか。

これは、学校でも同じことがいえるかと思います。先生の楽しんでいる気持ちはきっと子どもたちに伝播するでしょう。だから、まずは先生自身が教育現場を楽しんでいただきたい。先生が学校を楽しめば、子どもたちの反応も変わってくると思います。

PROFILE

うだ・こうのすけ●1966年静岡県生まれ。東京デザイン専門学校アニメーション科卒業。テレビアニメ『トランスフォーマー ザ☆ヘッドマスターズ』の演出助手・制作進行を皮切りに、『美少女戦士セーラームーン』『金田一少年の事件簿』など、数々の東映アニメーション作品の演出を手がける。現在、監督作『銀河へキックオフ!!』(NHK)が放映中。また『ONE PIECE THE MOVIE』など、劇場版アニメの監督も務めており、最新作は5月公開の『虹色ほたる～永遠の夏休み～』。

自分がおもしろいと思い、楽しんで取り組めば、その気持ちは必ず伝わる